
薄紅色の女神

緋城 鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄紅色の女神

【Nコード】

N8054Z

【作者名】

緋城 鈴

【あらすじ】

とある異世界の頂点に君臨する神様は膨大な時間を持て余していた。大量のお菓子を片手にお付き役を巻き添えにして豪華な自室でダラダラと過ごす毎日。とにかく飽きっぽい神様はどうとうそんな自堕落な生活に嫌気がさした。結果、退屈という名の危機的状況を打開する暴挙に出る。こうして始まった豪華客船を舞台とする宴。呼ばれたのは、一介の男子高校生、病を抱える少女、天才画家、大女優、殺人鬼、それから異世界からの来訪者——などなど。彼らはそれぞれの願いを叶えるために船上で奮闘する。神に選ばれし者ど

もが船上で織りなすちよつと不思議な群像劇、今ここに開幕！

Prologue

全ての終わりはあるクリスマスイブの夜だった。

灰色の寒空。

頬を撫でつける冷たい北風。

空から舞い降りる白い粉雪。

微かに漂うおいしそうな夕食の匂い。

どこからか聞こえる楽しげな声。

黄金に輝くまん丸の月。

本当はこんなはずじゃなかった。

みんなと同じように、温かな家で普段の食事ではお目にかかれな
いようなメニューで溢れる食卓を囲みながら一家団欒の一時を過ご
す。クリスマストリーを飾って、クリームたっぷりのケーキも食べ
て、最後にはプレゼント交換。いるはずもないサンタクロースを待
ち焦がれながら柔らかな布団に包まって幸せな夢をみる。

そんな、有り触れてはいても幸せなクリスマスイブにしたかった。

だけど、今更後悔したってもう遅い。

目の前にあるのは真っ白な大地を染める鮮やかな赫。

雪の白色ごときが入り混じっても中和しきれないくらい濃い、深
くて暗くて、そして不吉な赫。微かな月明かりに照らされて、禍々
しく輝く。

遠くから不快な叫声聞こえる。しばらくしたら静かになった。だ

けど、心の中に響く声は黙らない。

儚い二つの灯火は音もなく消える。

純白の世界はどす黒い闇に浸食されて、瞬く間に漆黒へと変貌する。

あたりを見回すと、どこまでも暗い闇が広がっていた。

こんなはずじゃなかった。

こんなはずじゃなかったのに……。

四方八方から飛んでくる銃弾。

夜の闇までもが容赦なく牙を剥いてずたずたに引き裂く。

思うことはただ一つ。

如何にこの惨劇に幕を下ろすか。

しかし、結論はとっくの昔に出ていた。

——思い残すことは何もない。

数々の小さな光の粒子が控えめに煌く。

見えるのはいつもと違った見慣れた景色。

凍える大気すら温かく感じた。

今夜、全てに別れを告げる。

「さようなら」

この瞬間シナリオは終焉を迎えた。

そして、知らず知らずのうちに新たな歯車が廻り始めたのだ――。

始動

「さて、エースはどっちでしょう？」

鈴の音を思わせる可愛らしい声が響き渡った。

白銀の城――。

穢れ一つない純白な外装から城主が勝手にそう名付けただけで、巷でそう呼ばれているわけでも何でもない。

面積も高さも半端なく、どこもかしこもとにかくゴージャス。広大な庭の中央にある規模もつくりもそこら辺のとは比にならない噴水や色とりどりの花を咲かせる温室などもある。

その中でも特にゴージャスな一室。城の最上階に位置するワンフロア全てを贅沢に使ったその部屋で、二人の男女がトランプを興じていた。

女の齢は12くらい。女というよりは少女という方が適切だろう。身を包むのは幾重にも重なった真っ白のフリルが特徴の薄紫色のドレス、彼女の背丈よりも遥かに長いと思われるまっすぐの髪はシヨッキングピンクだった。不敵に輝く双眼も髪と同じシヨッキングピンク。

そんな非現実的な要素もある小柄な少女の姿は、森から抜け出てきた妖精を連想させた。

彼女の目の前にはカードをじっと眺めて考え込む青年は20歳を少し過ぎたくらいで、赤みがかった灰色の瞳を持つ。同じく高級そうな黒いズボンと紺のシャツを身につけ、茶色い皮のベストを羽織っている。

どう考えても10歳前後の年の差はあるはずなのに、彼は薄い茶色の髪に軽く手を当てながら真剣な眼差しで見つめている。

その視線の先にあるのは少女が持つ二枚のランプのカード。

彼らが現在進行形で行っているのはランプで最も有名と言っても過言ではないゲーム、ババ抜きだった。

彼らは、向かい合って高級そうなふかふかのソファに座っている。

調度品は何もかも豪華だが、周りに散乱している漫画や家庭用ゲーム機やお菓子のせいで厳かな雰囲気は崩れ去る。

しかし、二人はそんなこと全く気にする様子もない。

間にある黒いローテーブルの上には用済みになったたくさんのランプが散在。最終段階まできている彼らのゲームで必要なのは、少女が持つスピードのエースとジョーカーと青年が持つハートのエースだけ。

青年は長い間考え込む。結果、音のない静かな時間がただただ無意味に過ぎて行った。長い長い静寂。それを最初に破ったのは少女の声だった。

「シリルまだ？」

最初と同じ外見相応の鈴の音みたいな声。

その一言にはこれでもかってくらい不満と皮肉が込められていた。

長い硬直から解き放たれたシリルと呼ばれた青年はゆっくりと視線をカードから不満を含む少女の瞳に移す。

「もう少し待って下さい。今考えてますから」

「長過ぎなんだよ。いくら考えたってそんなのわかんないんだからさっさとひいてよ」

「いや、でもどうしても10連敗は避けたいんですよ」

そう。実は、シリルたちのゲームはこれが一回戦ではない。実は既に計9回のババ抜きが行われ、その全てでシリルは負けていた。

シリルが考え込んでいる間、少女は暇そうに足をぶらぶらとさせる。それも飽きると、ソファアにでろんと横になりローテーブルの上に手を伸ばした。求めているのは彼女の大好物である甘いお菓子。しかし、あるの大量のランプだけ。菓子類は何一つなかった。

少女はそういえばさつき最後のアップルパイを食べてしまったことを思い出す。

仕方がなく席を立ち近くの棚からお菓子たちをとり出す。クッキー、マカロン、シフォンケーキといった洋菓子から、羊羹、饅頭、煎餅といった洋菓子まで種類は多彩。

彼女はそれらをローテーブルの上にどさつと置く。

勿論、先客だったランプは下敷きにされた。

「人が必死に考えてるときにお菓子ですか？」

不満そうなシリルの声。少女はマカロンを幸せそうにぱくつきながら答える。

「だって暇だからね。シリル遅いんだもん」

「考えてるんですよ。あなたと違って僕は真面目なんです」

「なにそれ？それじゃあボクが真面目じゃないみたいじゃん」

「仕事もせずにだらだらとランプを勤しんでいるような奴は真面目とはいいいません」

「それはシリルも一緒じゃん」

「僕の場合はこれが仕事ですから」

「……うう」

少女は何も答えない。目をそらし再びマカロンにぱくついた。

「とにかく、いい加減腹をくくって。あんまり遅いとシリルの番飛ばすよ？」

「それはあんまりです」

「じゃあ早く」

シリルは頭に手を当てて下を向く。何秒か眼を瞑ったあとゆっくりと開き、顔を上げた。灰色の瞳で少女と二枚のカードを見据える。そこには、はつきりとした覚悟が宿っていた。

「決めました」

「そうこなくっちゃ。じゃあ、さっさとひいて」

そして、右手を伸ばしてカードを一枚選ぶ。
選んだのは彼から見て左側のカードだった。

「どうかジョーカーじゃありませんように」

シリルは右手に持ったカードを祈るように裏返す。

そこに描かれていたのは――

「あ…」

カードに描かれていたのは不敵に笑う道化師と真っ黒な『J o k

e r』の文字だった。

「はい残念。エースはこっちでした。じゃあ次ボクの番ね」

そういつて少女はシリルが左手で持つカードをひったくる。

気付いたシリルは慌ててカードを引っこめようとしたが、努力の甲斐なくカードは少女の手の内に収まる。

「はい、ハートのエース。2枚揃ってボクの勝ち」

「ちよつと待って下さい！今のおかしいです！僕まだシャッフルし
てなかったじゃないですか！」

「ババ抜きに相手がシャッフルしたのを確認してから引けなんてル
ールないし。それに大体油断したシリルが悪いんだよ」

「そんな……」

「てことで、キミは10連敗ね。シリル、君は本当に弱いなあ」

「今のはあなたの反則負けです！」

「仮に今のが反則だったとしても、今まで9連敗もしてるんだから
キミが弱いことに変わりはない。それに、次もボクが勝つに決まっ
てるから10連敗どころか100連敗もすぐそこだよ」

「うう……」

シリルはわなわなと身を震わせるが、次の言葉が紡がれることは
ない。

そんな彼を見て少女は長い桃色の髪を震わせながら高らかに笑う。
それはまさしく勝ち誇った者の笑みだった。

しかし、笑い声もそう長くは続かず、少女は今までの楽しそうな
表情を一変させてつまらなさそうに足をぶらつかせる。

「でも、ババ抜きはもういいや。飽きた。シリルくそ弱いし」
「クソ弱くてすいませんね」

「謝ったところで強くはならないんだよ、キミ」

「それくらい知ってますから!」

「あー。暇だ。暇暇暇暇暇暇」

「暇って連呼するな!」

「だって、暇なんだもん」

少女は黄色のマカロンを手に取りもぐもぐと食べ始める。

「でさ、ボクは考えたんだ」

「何をです?」

「如何にこの暇な状況を打破するか」

「……いや、やるべき仕事は山のようにあるので決して暇ではありませんよ」

「細かいことは気にしない。で、名案思い付いたの」
「名案?」

シリルは問い返しながら顔をしかめる。

その双眼に疑惑と不安の色が浮かび上がった。

「あのね——」

もったいぶるように一拍おいてから少女は口を開いた。

「下界に遊びに行こうと思う」

一瞬、空白の時間が生まれる。
その名は、シリルの思考時間。

時間をかけてようやく理解できたシリルは遅れて「えっ！」と声を上げる。

「下界ってあの下界ですか？」

「下界にあのでもないでしょ。偶には人間たちとふれあってこようと思っ」

「引きこもりのあなたが外に出たいなんてどういう風の吹きまわしですか！？ ああ、きっと明日は大雨ですね……」

「ここは天上界だから、雨は望まない限り絶対に振らないんだよ？」
「比喻ですよ。比喻。それにしても、珍しいこともあるものですね。あ、全然構わないですよ。寧ろ、大歓迎です。あなたがいない間、僕は静かで穏やかなひと時を紅茶でも嗜みながら過ごしていますから」

「え？」

「……え？」

少女はあきれたように首を振る。シリルも何が「え？」なのか理解できなかったが、その直後気付いてしまった。苦虫を噛み潰したかのようにみるみる不快感を露わにしていく。

「もしかして――」

「勿論、シリルも一緒に行くんだからね？」

「そ、そんなあ……」

「何がそんなだよ？ 付き人としては当然のことだよ」

少女はけたけたと楽しそうに笑う。反してシリルは深い溜息を吐いた。

「……わかりましたよ。行けばいいんでしょう？行けば」

「そうそう。行けばいいの。でも、どうせならより楽しい下界ライフを送りたいな……。あ、またいいこと考えちゃった」

「……あなたのことですから、また滅茶苦茶な発想ですよ？それちゃんと実行できるのかよく吟味してください」

「それは大丈夫。シリル、キミはボクのこと何だと思ってるの？」

「——神の力をもってすれば出来ないことなんてないから」

少女——神様は、今日見せた中で一番美しい輝かしい不敵な笑みを浮かべる。

「決めたからにはさっさと始めるよ。シリル、今から準備するから手伝って」

瞳をキラキラと輝かせる上機嫌の神様。

そんな彼女を見てシリルは大きくため息をついた。

起爆（前書き）

起爆

リリリリリリリリリリ――。

ラーズリガ学園高等部学生寮のとある一室。狭くて薄暗いだけではなく防音設備も大してされていないその部屋に、けたたましい目覚まし時計のアラームが鳴り響いた。

「もう朝か……」

馬鹿でかい音に叩き起こされた一人の男子生徒――ランディ・ハルフォードは部屋に備え付けられた二段ベッドの下段でぽつりと呟いた。

高等部2年の寮生。うつすらと開いた栗色の瞳やそのだるそうな声音からは眠気しか窺えない。瞳と同じく栗色の短髪は寝癖でボサボサだった。

ランディは布団に潜ったまま手だけを隣に置いてあるチェストの上へと伸ばして音の発信源を探る。今は一年で最も寒い時期。ご丁寧に外では雪まで降っていてとても寒いのである。

3秒とかからず彼の手は目覚ましを見つけた。そして、慣れた手つきでアラームを止める。しかし、音は止まなかった。寧ろスヌーズ機能のせいで音は大きくなった。

理由は至極簡単。

この目覚ましはそもそも鳴ってないからだ。

「あ、そうか……」

ランディは気だるそうに体を起こすと目をしゅぱしゅぱさせながらゆっくりと上を向いた。そこにあるのは上段のベットの底板。時々ギシギシと音を立てながら動いている。

ランディは上に向かって力の限り叫んだ。

「チェスター！起きろ！」

起床直後にしてはなかなかの音量。

しかし、上からの反応はない。まだ熟睡中のようだ。

仕方がないのでもう一度叫んだ。

「チェスター！朝だ！さっさと起きろ！そして、目覚ましを止めろっ！！」

そこまで言って初めてチェスターと呼ばれた上のベッドの寮生はもぞもぞと動き始めた。

ようやく起きたようだ。

まもなく煩わしいことこの上ない目覚ましのアラームは止んだ。

「おはよー、ランディ。毎朝悪いね」

チェスターは上から逆さまにひょいっと顔を出して、人懐っこい笑顔を向けた。

赤みがかった巻き毛と緑色の瞳を持つ少年で、年齢はランディと同じはずなのにもっと幼い印象を与える。顔立ちが童顔なのか、それとも屈託のない笑顔のせいなのか。

「おはよう。でも、悪いと思ってるならちゃんと自分で起きろよ」
「それは無理。と言うか、出来ないから起こしてもらってるんだよ」

自信満々の返事。

一瞬理にかなった返答のように思えるが全然そんなことない。

ランディはすかさず言い返す。

「少しくらい努力をしようとか思わないのか？」

「全然。可能性が限りなくゼロに近いことやって時間が無駄だろ」

チェスターはにっと歯を見せる。ランディも負けずと笑顔を返す。
しかし、口元だけ。目が明らかに笑ってなかった。

そして、目の前で揺れている赤い巻き毛を鷲掴みにした。

「痛てててっ！ランディ！離して！」

「一人で起きられるようになったら離してやるよ」

「無理！」

「無理じゃなくてやれよ！」

「わかった！努力はするから！だから離せ！」

「じゃあ明日起きれなかったらなんか奢れ」

「わかったから！」

すると、ランディはあっけなく握っていた前髪を離した。そして、嬉しそうな表情を浮かべる。

「契約成立」

何秒かの無言の空白。ようやく理解したチェスターは焦って弁解

を始める。

「待って！さっきのは違っ……」

「男に二言はないよな、チェスター・オースティン？」

フルネームで追い打ちをかける。

チェスターは何度か言おうと口をパクパクさせたが、結局「
ないです」とだけだった。

「約束守れよ」

「わかってる」

しかし、その直後「……卑怯者」というチェスターの呟きをラン
ディは聞き逃さなかった。

「その卑怯者が同室じゃなかったら毎日学校に遅刻していたんじゃないかな、チェスター君」

「いや、毎朝怒鳴る奴ではなく毎朝優しく起こしてくれる人がルームメイトだったらオレの学校生活はもっと充実していたかもしれない」

「……もう起こしてやんねーぞ？」

「それは勘弁。あ、もうこんな時間。もたもたしてらんねえ」

そう言ってチェスターは自分のテリトリーへと戻る。

ふと何年も愛用している腕時計に目をやると、その針たちは8時
過ぎを示していた。

「……8時？」

ランディはもう一度確認する。

長針は1と2の間くらい。短針は何度見ても8の所にある。

「チェスター、今何時だ？」

「え、何時って時計持ってるだろ？」

「なんでもいいから早く」

「なんだよ。まあ、良いけど。で、えーと……」

上から予想通りだけど聞きたくなかった答えが降ってきた。

「8時7分……！あ、あと10分くらいしかないじゃん！」

チェスターは口に出してからようやく気がついたようだ。

「何で？おい、チェスター。お前目覚ましかけ間違えたら！？」

「そうかも……。悪い！だけど、お前のは？お前の目覚ましは何で鳴んねーんだよ！」

「俺のは電池切れてんの。どうせチェスターのが鳴るからまだいいっかと思って」

「ふざけんなよっ！お前も同罪だ！」

「あー、わかったよ。俺も悪かったから。とにかく急げ！遅刻する！」

そのあとのランディの行動は早かった。

超高速でクローゼットを開けて制服を取り出し、もう一着を放り投げた。そして、制服に着替えてパジャマを片づけて軽く髪を整えて歯磨きしてベッド整えて持ち物の確認をして準備が完璧に整って部屋の入口に立つまで僅か5分弱。かなりの早業だった。

「早ええよ！」

「お前が遅いんだよ！」

チェスターはまだ部屋の中で慌てふためいていた。

「全く……、早くしろよ！皆勤賞かかってんだ！」

折角急いで準備しても相手がトロかったら意味がない。はあ、とランディは深く溜息をつく。腕時計を見ると、学校開始の20分までまだ5分ちよっと時間が残っていた。

「3分で教室まで行くとすると辛うじて間に合うか」

1分くらいは待ってやるかと思いなおしたランディは、取り敢えずドアを開けた。

すると、何かが床に落ちた音がした。

足元を見ると、真っ白い封筒が落ちている。今までドアに挟まっていたようだ。

拾い上げて裏返えす。

そこには美しい筆記体で『Dear Randy Halford』の文字。しかし、書かれているのはそれだけで、差出人だけではなくこちらの住所や切手すらない。

「何だ、これ……？」

しばらく首を捻って考えるが、心当たりが全くない。チェスターに送られてきたものかとも考えたが、宛名は自分だから違うだろう。

「待たせたな！行くぞ！」

すると、後ろからチェスターの声がした。

その声を聞いてランディは無造作にその封筒を鞆にぶち込む。

「よし、走るぞ！」

そして、チェスターとともに駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8054z/>

薄紅色の女神

2011年12月27日20時49分発行